

第 5 9 回 OMC 映像フェスティバル

プログラム決まる

来る 9 月 2 9 日 (日曜日) 13 時より大阪市立中央会館で行われる、第 5 9 回 OMC 映像フェスティバルのプログラムが決定、直ちに準備に取り掛かり、ご案内へと手順が進んでいます。

■今年のはがきでご案内

昨年までは A4 版表裏印刷 3 つ折り で封筒に入れ、ご案内を差し上げていましたが、今年から経費削減ではがきにしました。プログラムの大きさの歴史を振り返ってみますと、昭和 62 年 (1987) 年までは前々会長の川畑健司グラフィックデザイナーによる A4 版表裏印刷でしたが、昭和 63 (1988) 年から約 16 年間、平成 17 (2005) 年までのはがきでのプログラムでした。一つは、会員数が減って経費削減を迫られたこともあります。然し平成 18 (2006) 年第 45 回 OMC フェスティバルから、はがきを止め A4 版に戻して昨年まで来たという経緯があります。しかし会員数の減少に伴い今後の経費収支の見通しを予測すると、郵送料の値上げもあってフェスティバル運営も考え直さざるを得なくなりました。

■開催日当日は、持参されたはがきを別に作った A4 のプログラムと交換

今までは封筒を芳名簿記入替りに頂いて、プログラムそのものは持って入場していただいていたのですが、今回ははがきを頂いて全員に A4 版のプログラムを手渡しして会場に入ってもらふことにします。

■当日の開催運営にご協力を

観客動員のお願いのほか、当日、椅子並べ、受付、照明、映写、途中来場者への応対等に出品者の方々は勿論、それ以外の方も出来るだけお手伝いをお願いいたします。具体的には岡本副会長により企画立案、協力依頼がありますのでどうぞよろしく。

9 月例会のご案内

■第 2 例会；第 3 木曜日 19 日 13 時より。

「望」課題作品お持ちください。課題コン終了後は一般作品上映、旧作、編集途中で意見を求めたいもの等、どうぞお持ちください。二次会の喫茶店でのひと時も楽しいですよ。

■通常例会；第 4 土曜日 28 日 18 時より、いつもの難波市民学習センターにて。

第59回 OMC 映像フェスティバル プログラム

1. 鵜飼舟	10分	森口 吉正	9. 幻の五新鉄道	9分	紙本 勝
2. モニュメントバレー	11分	華岡 汪	10. 銀杏 里人と共に	7分	河口 艶志
3. 宇治川散策	8分	宮崎紀代子	11. わたしもかかしのなかまに	6分	岡本 至弘
4. 東西横貫公路縦断	11分	山本 正夢	12. 諏訪神社霜月祭	15分	河合源七郎
5. 細川ガラシャ	10分	江村 一郎	13. 理髪店にて	9分	堀 皓二
6. ノートルダム大聖堂	6分	中川 良三	14. 生命の樹復活のイルミネーション	13分	進藤 信男
7. 伊根の潮騒	8分	関 剛	15. 四季・美瑛	10分	合原 一夫
8. ほんまもんへの拘り	10分	中村 幸子	16. 祇園祭 長刀鉾	12分	高瀬 辰雄

<休憩.>

大阪アマチュア映像祭 11月17日（日曜日）13時～

と決まりました。ご予約下さい

■予告；10月例会は会場の都合で、第3土曜日19日と一週間前倒しとなりますのでご予約下さい。

■予告；11月例会予定日の第4土曜日は祝日となり、会場は夜間閉館となり使えませんので、第5土曜日30日に変更となります。10月、11月とも開催曜日が通常と異なりますのでご注意下さい。

堀 皓二会員が 東京アマチュア映像祭 全国ビデオコンテストに入賞

■入賞 植村牧場のヒデちゃん 8分
堀 皓二さん おめでとうございます



堺・撮れとれ映像祭 9月7日(土)

13時より堺市立芸術文化ホールで開催、出来るだけ出かけて行きましょう。

8月通常例会レポート

格別に暑かった夏が長く続き、台風10号をきっかけに「台風一過」とはいかなかったが、立秋を過ぎると朝夕すずしさを感じられるようになってきた。しかし、例を見ない今年の暑さにいささか疲れがたまっている思いは会員の皆さんも同じなのだろう。夏場になって、例会参加が少なくなっているが、秋の声を聴くと皆さんも活動再開されることでしょう。

出席者； 江村、紙本、合原、関、高瀬、中川、華岡、宮崎、森口、森下、山本、進藤の 12氏

運営担当；司会・堀世話役が欠席の為合原会長が代行、書記・進藤、映写・中川、記録、江村、受付・照明・宮崎、森口、掲示・紙本

■上映（今月の講評は進藤書記担当）

1. おどるんや

江村一郎

7分50秒

第50回和歌山城天守閣 再建50周年になる今年「紀州おどり ぶんだら」と「第15回紀州よさこい祭」が相次いで行われた。キャッチフレーズは「おどるんや」だった。作者を引き付けるポイントがこんなところにあったのだろう。いずれも、7月末から8月はじめの熱いさなかの行事。和歌山城からはじまり、水を来客に向けて噴霧している風景を見ただけで実感できる。しっかりと今はやりの携帯扇風機の女性もとらえている。

はじめに出てくる二人の司会者と思われるカットは、なくても真夏の雰囲気は充分伝わってくる。

「ぶんだら」は、紀伊国屋文左衛門をイメージした言葉のようだ。和歌山のよさこいは、若干テンポがおそく踊りも総体的にゆったり調が多い。作者独特のカットつなぎを見せるのに苦心されたのではと想像する。



賑やかな祭りで現場音が大きい中ですが、音が飽和しているのが気かり。若干絞気味にしてはどうでしょうか。

終の締め方についての意見がありました。夜の総踊りなどで締めくくるやり方もありますが、せめて曲の区切りを活用する手立ても取り入れ易いのでは・・・。

2. 明知城と明智城

紙本 勝

12分00秒

来年予定されている大河ドラマ「麒麟がくる」の放送開始が近づいてきたためか、明智一族への関心が高まっている。兵庫県丹波地方から、ついに岐阜まで取材範囲が広がった。

歴史ファンならずとも、「明知」と「明智」を並べられると興味を引きつけられる。明智光秀の生誕地は、いずこなのか・岐阜県恵那市明智町「白鷹城・明知城」と岐阜県可児市勢田「長山城・明智城」、両者ともかつての美濃国なのです。江戸時代になり、遠山の金さんこと遠山金四郎(景元)は、白鷹・明知城主の子孫だったことを思い出した。ここへは、JR 中央線恵那駅から明智鉄道が通っていた。しかし、よく知られた犬山城に近くあまり宣伝されていない明智長山城には歴代の墓所もありどうやら可能性がありそうで、大河ドラマではどのように描かれるのか楽しみだと結んでおられる。この大河ドラマを楽しみにしましょう。



3. 矢田寺とあじさい

中川 良三

6分16秒

矢田寺は、この時期一度は撮影に訪れたいところ。今年のように、厳しい暑さと激しい雨の梅雨にはそれもなかなか撮影のチャンスを捉え難かったのではないのでしょうか。アジサイの花は、スチール写真では暗くなりがちで難しい被写体といわれますが、七変化する花を追ってみるのも一考かと。

タイトルの出し方、終わりへの導き方についての考え方、花の描写をもう少し長くして余韻を残して終わるようにはとの見方がありました。



4. 台南の日本時代

山本 正夢

9分00秒

日本が台湾との関係を深めたのは、1895年日清戦争の後からだ。この作品は、日本時代とされているのでこれから、1945年の第二次大戦終了までのこと。特に、1910年明治43年から1940年昭和15年までは、台湾総督府が置かれるなど、中国・清朝時代の建物から大きく変わっていった時。官庁や飲食店などに華麗な外見とレンガ作りが特徴。日本人移民が最も多くなった時でもあったようです。

転機となった1937年昭和12年から終戦までの大きな社会変化期を経た台湾における日本時代。

作品では、現存する建物を通してこれらを伝えている。それぞれのカットに、これらの背景が隠されているのでじっくりと見たい作品だった。アマチュアの歴史作品なので、時代背景までの表現が出来ないもどかしさは作者も感じておられると思う。

それにしても、観光地では見られないこんなテーマを求めていかれるバイタリティーは素晴らしいと強く感じるのです。



5. 大阪天満宮阿波踊り

高瀬辰雄

7分30秒

第7回になるという「大阪天満宮阿波踊り」。大阪天満宮と天神橋筋1丁目から3丁目の商店街が会場。

商店街で踊り天満宮に奉納されている。関西を拠点に活動している阿波踊り19連が参加した。作品では、選抜されたチーム・連による天満宮での奉納踊りがとりあげられている。

男踊りは、半天 (法被) を着て踊る半天踊り、浴衣 をしりからげに着て踊る浴衣踊り、いずれも足袋 を履いて踊る。時には勇猛に、時には滑稽に。

女踊りは、浴衣に編笠を深く被り、下駄 を履いている。一般の浴衣と異なりじゅばん、裾除け、手甲 を付け黒繻子 の半幅帯 をお太鼓 のように結ぶ。艶っぽく、上品に踊る。

この作品では、ゆったりとはじまり、踊手の表情もアップでうまくとらえ、



最後に子供たちが登場するという作者の狙いがうまく表現されている。7分という短い時間ではあったが、見る人を十二分に楽しませてくれる。縄張りの外側での撮影に限られた条件で、良く踊り手の表情まで撮れたと思う。

6. 浜松の響き

合原一夫

13分43秒

平成9年の撮影会での作品という。遠州のからっ風と子供の誕生を祝う「はつ凧」の風習が根付いた「町民たち手作り」のまつり。凧揚げ合戦と御殿屋台引き回しが行われている。

砂丘で繰り広げられる凧揚げ合戦に熱中する大人たち。まだ良く分からないのか、大人に抱かれてきょんとしている子供たち。熱狂ぶりはさすが大人たち。糸が切れて落ちていくひとつの凧が印象的。

夜の屋台引き回しは、御殿屋台と言われるように豪華な屋台だ。こんなに賑わっている町へ一度は行ってみたい思いがした。



7. 神子畑鉱山・選鉱場

進藤 信男

10分20秒

兵庫県北部に連なる鉱石の道。南は生野銀山、北は中瀬金山。それらに挟まれるようにある明延鉱山と神子畑。

今回は、この神子畑を取り上げている。金山から明延鉱山専用の選鉱場へ。現在の、朝来市と養父市が接するところにあり、最近まで非公開のこともあり注目されていなかった。平成29年日本遺産認定が契機になったというから、町おこしはこんなところから始まるようだ。

冬は、雪道になり夏場だけの撮影機会。鉱山地帯とはいえ、限界集落で携帯電話の通じない場所が多いというから計画的に撮影機会を設ける必要があった。この作品では、現在の金山から選鉱場への姿を中心に表現されている。かつては、限られた人たちに許されていた木地師の人たちが住んでいた所とも聞く。近くにある竹田城のように観光地化が進むまでがアマチュアに与えられた時間かもしれない。

例会終了後、近くの喫茶店で映像談義に花を咲かせて、大いに楽しみあい解散しました



<コラム>

右か左か

合原 一夫

広島での映像発表会の帰途、新幹線広島駅構内の上りエスカレーターは外人客の多い団体客で混んでおり、全員左側に寄って一列に並んでいました。その団体客が新大阪駅で降りて今度は下りのエスカレーターが混んでおり、全員左側に並んでいました。

その中で一人だけ日本人の女性が右側に立ち、次に外人さんが左に、私は関西人なので右側に立ちました。そこで私がさっさとかけ足で降りるものと勘違いしたのか、外人さんが、一段下に右側に立っている日本人女性に、早く左側に寄りなさい とでも言っているのか、その右側の女性に叫び始めたのです。

その女性、関西は右に並ぶものと知っていて右側に立っていたのでしょうか。その女性、今度はそっちこそ“右に寄りなさい”と言い返し、口論となりました。しばらく口論していると下のフロアについてしまい決着がつかないまま終了です。

乗り換えで地下鉄に行くと、全員が日本人で皆、右側に立っていて何かホッとしたものを感じました。

次は下車駅の桃山台駅で、一斉に降りた乗客で上りエスカレーターの入り口付近が混んでいます。桃山台のエスカレーターは4階分ぐらいの長いものです。私は右側が混んでいて左側がガラ空きだったので、左側に立ちました。ところが、下から上がってきた歩き昇る男に、さかんに私に早く上がれとせつづくのです。仕方なく私もエスカレーターの左側をあるいて上り始めましたが、そのきつい事、エスカレーターを歩き昇ることが、こんなにきついとは、さすがトシだなと思いました。幸い5メートル昇ったところで、右側の段に空きを見つけ、そこにもぐりこみ、ほっとひと息です。

旅行者や、外人さんが増えたのでエスカレーターの右か左か地元によって違うのは困ります。エスカレーターで歩くのは危険だから二人並んで利用するよう呼び掛けするとの話もありますが。早くしてほしいですね。